「日々の理科」（第 1845 号）　2019,-7,28

「初夏のキノコ（３）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

キノコには栄養は少ない。我々がキノコを好んで食用にするのは、カロリーを摂取するというよりは、風味やうまみ（各種のアミノ酸）を楽しむ為である。しかし、ある種の虫にとっては、キノコは「主食」となっている。

ハツタケの仲間（ベニタケ科のキノコ）の老菌には、たいていこの小さな虫がついている。「キノコバエ」の仲間だ。キノコバエは成虫ではなく、幼虫がキノコをエサとする。この成虫は卵を産みに来ているのだ。幼虫はすぐにキノコを食べて成長する。

キノコ（子実体）は寿命が短い。特に菌体が柔らかく、組織が疎なハツタケの仲間は、写真のようにボロボロになるのに、数日しかかからない。キノコバエのような小さなハエの場合、孵化から羽化まで 10 日以下の場合もある。ボロボロになった菌体の中で、サナギが見つかることもある。

キノコを観察する時は、傘の裏側の「ヒダ」をよく見ることが大切だ。カワリハツはヒダが密生しているのがわかる。しかし、シイタケのような弾力感には乏しく、ちょっとした力で、ボロボロ折れてしまう。

茎の断面も種の同定上、重要な点だ。シイタケやマツタケのように、茎の中心まで固くぎっしりとしているものを**中実（ちゅうじつ）**、カワリハツのように中心部がスカスカのものを**中空（ちゅうくう）**という。

カワリハツの場合、茎の中心部はまるでマシュマロのようにふわふわの組織で満たされている。キノコは傘で胞子を作って飛散させるのが目的なので、茎を形成する材料は、少しでも節約したいのだろう。